

【研究活動報告】

北京報告

稲賀 繁美

国際日本文化研究センター総合研究大学院大学助教授

平成 14 (2001) 年度秋より、北京外国語大学、日本研究中心に出講。国際交流基金よりの派遣による外国人専門家の一員として、担当は9月入学の修士1年生を対象とした「日本文化論基礎」、および修士2年生を対象とした「日本文化論特講」。学生は入学当初から「言語」、「文学」、「文化」、「社会」の4コースに分けられており、それぞれ1学年4~5名。中国全国の大学、師範大学の日本語科卒業生を中心とした受験生から8倍程度の倍率の試験に合格した学生たちの日本語運用能力は、新入生の場合でも、日本語での授業にほとんど不安を感じさせない水準にある。2年生は後期に半年、日本に留学し、修士論文を準備、帰国後論文審査をへて卒業となる。ただ現在の学生構成はその9割が女子。男子在校生に聞いたところ、大学での同級生はほぼすべて就職しており、自分のように修士まで進もうとする者はかえって例外的という。また卒業後も、とりわけ北京で就職を見つけるのは困難といていた。学生ひとりひとりの日本語運用能力や専門的知識のわりに、なおそれに相応しいだけの社会的認知が得られていない懸念がある。近年の学生たちにはMBAつまりビジネス・アドミニストレーションの修士号が就職には有利とのことで、北京外国語大学にもビジネス・スクー

ルが発足。従来の語学学校も今後の就職戦線に適した変身を遂げようとしている。

1年生むけの授業では、これまでの一枚岩の価値観に従った情報吸収、日本語の習得のみで、その活用や研究方法などには、まだまったく経験のない学生たちを対象としたことから、当初の予定を変更して、時事問題を扱った。個別の問題に関する新聞、雑誌の記事を日本語、中国語の媒体比較などを通して分析、検討することを通じ、学生たちの批判能力の開発を目指すことに眼目を置いた。授業中の発言も日本に比べればはるかに活発だが、そうした自由討論とともに、批評文を実際に執筆するように指示し、個別に添削のうえ返却する作業を加えた。テニオハなどは、外国人には決して容易でないし、中国語を母語とする場合、受動、能動の違い、日本語の時制は簡単には統御できない。くわえて、パラグラフ・メイキング、他者の意見の引用と批判的分析といった手法は、これまでの教育でまったくなされていないため、毎回少しずつ、新聞の囲み記事などを参考にして、手法を実地に身につけてもらうように訓練した。おりから教科書問題、首相の靖国神社参拝問題、そして9・11にも増して、中国では毎年の9・18(日本で言う「満州事変」)への中日の報道のあまりの落差、など話題には事欠かない。ただ愛国心の吐露を国是として教育を受けてきた学生たちと、愛国心を語れば右翼と見なされる日本の国情の違い、また一種類の国定教科書が即ち絶対にして正義である中国と、複数の検定教科書の許認可に文部科学省が公正中立を掲げる日本の在り方との違いなど、納得してもらうには膨大な忍耐と謙虚な姿勢が不可避であることも、納得させられた。

2年生は半年後に留学を控えていて、すでに専攻を詳しく決める段階に至っていた。いずれも女子学生だが、そのうち2名は政治思想志望で、ひとは陸羯南、もうひとは内藤湖南と吉野作造の対中国観の比較を目指していた。ふたりとももう十分に日本の修士終了程度の知識をもっており、畑違いの当方には、とても専門的な指導ができる状態ではなかった。とはいえ図書館の充実した基本的文献のお陰で、俄勉強も進んだ。学生諸君のお陰で初歩から勉強をさせてもらい、いろいろなことを学んだのも貴重だった。のこるふたりは、一方は柳宗悦と民芸、他方は日本庭園と中国庭園における借景意識の比較といった主題に落ち着き、幸い4名とも日本側で最適と思われる指導教官から受け入れ受諾のご返答をいただいている。この例からも明らかだろうが、1年次に授業を受けた日本人専家の授業が学生諸君の修士論文の主題決定に、おおきな影響力を及ぼす。そして2年次の授業担当者の授業が学生諸君にとってどこまで意義のあるものか、いささか問題なしともしない。現行の2年終了カリキュラムでは、学生諸君が目先に囚われた選択をしがちなため、終了年限の延長も来年度から導入される予定と伺った。また、かならずしも将来研究者になるわけではない学生諸君を対象に、ひたすら日本の過度に専門化した修士論文の作法を無理強いすることも、大局的な見地からすれば、かえって本来の意図からは逸脱した結果を招かぬとも限るまい。ともすれば、日本の大学にいて当たり前と思っている作法や研究のありかたを、外からの視点によって捕らえなおし、そこに潜む弱点やひとりよがり、井の中の蛙ぶりをいろいろと反省した。

全寮制で集団生活をしている学生たちは、そうじてひとなつこく、日本にはもはやない、暖かい師弟関係を作ってゆくのも容易だった。その反面、まるで真っ白な吸い取り紙に吸い取られるように、こちら側の知識や研究態度が伝わってゆくことから、教える側の責任も大きなものとなる。だが責任の大きさだけ、学生諸君ひとりひとりの将来が楽しみで、およそ日本では味わったことのないような教育の醍醐味を味わえた。だがそれは翻って、日本の大学教育の現場の荒廃と形式主義への危機感を深めることともなった。

大平学校を母体として発展した研究中心では、すでにその運営や教育の中核は、最初期の卒業生たちの世代に委ねられている。来年度には日本政府無償資金協力による5階建の施設へと移動することが決まっている。将来の発展を祈るとともに、専門分化による一体感の喪失、事業の日常化による知的緊張の弛緩など、官僚化の弊害への対処にも期待したい。

JCLA-KANSAI

**日本比較文学界関西支部
ニュースレター
JCLA KANSAI
NEWSLETTER**

May 2002 JCLA KANSAI Vol.IX, No.1